



『海亀』(2002年)
家庭から排出される
ペットボトルを集めて、カメのオブジェを作った



『かえっこ』(2000年～)
子どもたちが使わなくなったおもちゃを持ち寄って交換をするイベント。現在でも全国各地で開催され続けている



◀ 藤さんの違和感から生まれた作品やプロジェクト

新しい発想で アートの概念を変える

未知の価値観との出会い

美術家として数々の作品を生み出す傍ら、アートを通じた多様なプロジェクトを手掛ける藤浩志さんの活動のルーツは、20代のときに青年海外協力隊として派遣されたバブアニューギニアにあった。きっかけは、偶然目にした協力隊の説明会のポスターだ。「初めは国際協力に関心があったわけではなく、西洋の文化が入り、国の価値観が変化していた日本の明治時代に興味があり、開発途上国

に行けば、同じような時代にタイムスリップできるのではないかと、いう期待があったのです」。

隊員時代は、美術大学を卒業した強みを生かして、バブアニューギニア唯一の国立芸術学校で美術を教えた。同国では小中学校で美術の授業はないため、ほとんどの生徒が絵を描いたことすらなかった。「人物をモデルにした彫刻を作る授業の中で、紙に下書きを描かせようとしたのですが、生徒たちは一向に描こうとしません。理由を尋ねると、紙に人の大きさが入



るわけがないと言うのです。そのとき、人物を「記号化」して描く概念がないことに気付きました。他にも、色を表す言葉が少ない

など、ことごとく日本と違う価値観に驚きの連続だったが、その経験こそが宝物だと藤さんは話す。「全く新しい視点を持つことができ、逆にそれまでの自分の価値観が特殊なものに感じることもありました。そこから、日本社会に対するさまざまな違和感を抱くようになったのです」。

アートで地域を元気に

帰国後は、こうした違和感が作品づくりのヒントになった。その一つが、家庭から排出されたベツ

トボトルを集めて制作したオブジェだ。「隊員時代に、パンの袋の口を留めるプラスチック素材を学生がアクセサリーとして耳に付けたら、みんながまねし始めたということがありました。この経験から、日本でビニールやプラスチックが大量に捨てられていることに違和感を抱き、廃品を使った作品づくりを始めたのです」。

もう一つ、藤さんが協力隊の経験から学んだことは、地域とつながりを持つことの大切さだ。「現地の人は、身近な素材を使ってカヌーを作ったり、地域にある顔料でボディペインティングをしたりしていました。その姿に心を動かされ、地域資源や適正技術を生かしたアートを目指すようになりました」。地域の中に創造的活動の拠点を作ろうと考え、全国各地を回って、アートを通じたワークショップや、まちづくりプロジェクトを手掛けるようになった。また、十和田市現代美術館の館長も務め、美術館が大学や自治体と連携しながら地域研究を行う仕組みを確立させようと取り組んでいる。

「世界のどこに新しい時代を切り開く価値観が潜んでいるかわかりません。私にとってバブアニューギニアでの経験は、自分の視野と感性を大きく広げてくれました」と語る藤さん。今後も面白い「仕掛け」を生み出してくれそうだ。

『さよなら蛙達』(1993年)
世界の食糧問題に対する思いから、お米で作ったカエルを展示した



美術家／十和田市現代美術館館長／
秋田公立美術大学教授

藤 浩志さん

FUJII Hiroshi

鹿児島県生まれ。京都市立芸術大学大学院美術研究科を修了後、1986年から青年海外協力隊としてバブアニューギニア国立芸術学校で講師を務める。現在、藤浩志企画制作室の代表を務め、地域資源や適正技術を活用した美術作品の制作のほか、全国各地でアートプロジェクトを展開している。

PROFILE